

《Veoir plus apertement...》

嶋 崎 陽 一

序

十三世紀に書かれた散文物語の中でも、『聖杯の探索』*la Queste del Saint Graal*¹⁾（以下『探索』と略す）は、聖杯をめぐる恩寵思想の神秘性によって、アーサー王宮廷を中心とした聖杯物語群のみならず、中世文学全体の中でひととき異彩を放つ作品たり得ているが、また内容に限らず物語の語りの手法においても、他の作品には見られない独特の、しかも整然とした形式感を示して読む者の関心を惹かずにおかない。その形式感とは、次のようなものである。即ち、『探索』の物語全体は多数のエピソードの連続から構成されているが、それらエピソードの中では、一たび何か事件が語られると、続いて事件の因ってきたる縁起なり事件中に現れた不思議のもたらす象徴的意味の読解なりが提示される、という具合に、一つの事件の内容がほとんど常に、いわば表層と深層の二面から語り起こされる。その有様はちょうど、中世の学者達が聖書に注釈を挿入していった作業にも似ている。例を挙げよう。

〈騎士ランスロは聖杯の探索を続けてある日、森の中で人気のない聖堂に宿をとる。深夜、その聖堂を訪れた別の騎士は聖杯の奇蹟に与かることができたが、ランスロは金縛りにあって聖杯を見逃してしまう。奇蹟が終わり、金縛りも解けて後、ランスロは天からの声を聞く〉:
《Lancelot, plus durs que pierre, plus amers que fuz, plus nuz et plus despris que figuiers, coment fus tu si hardiz que tu ou leu ou li Saint Graalx reperast osas entrer? Va t'en de ci, car li leux est ja toz empulentez de ton repere.》(p. 61, ll. 16 — 20)

〈言葉の言わんとするところが理解できず煩悶するランスロは、聖堂を発ってから、一人の修道士に出会う。修道士は彼に天の声の内容を解き聞かせる〉:《En ce que len vos apela plus durs que pierre puet len une merveille entendre. Car toute pierre est dure de sa nature et meesmement l'une plus que l'autre. Et par la pierre ou len troeve durté puet len entendre le pecheor, qui tant s'est endormiz et endurciz en son pechié que ses cuers en est si endurciz qu'il ne puet estre amoloiez ne par feu ne par eve. Par feu ne puet il estre amoloiez, car li feus dou Saint Esperit n'i puet entrer ne trover leu, por le vessel qui

est orz et les desviez pechiez que cil a acreuz et amoncelez de jor en jor. Et par eve ne puet il amoloiez, car la parole dou Saint Esperit, qui est la douce eve et la douce pluie, ne puet estre receue en son cuer. Car Nostre Sires ne se herbergera ja en leu ou ses anemis soit, ainz veut que li ostiex ou il descendra soit nez et espurgiez de toz vices et de toutes ordures. Et par cele entencion est li pechierres apelez pierre, por la grant durté que Nostre Sires troeve en lui. Mes ce covient veoir par droit coment tu es plus pecheors de toz autres pecheors. [...]>(p. 67, l. 27 — p. 68, l. 12)

こうした語りの手法に関する批評は従来、審美的な観点、あるいは個別のエピソードの内容に関する論点に留まっていた。前者の立場から作品を論じる者は、形式への固執からくる鈍重さが作品の文学性を犠牲にしているとの批判を述べたし、後者の立場では、個々のエピソードに現れるサンボリズムの分析、その裏付けとなる思想への論及を展開する研究者が大半で、いずれにせよこの語りの手法自体が秘める文学性、つまり、この手法が作品中で受け持つ構造上の役割について体系的に整理した研究は少なかった。本論考は、こうした『探索』研究上の欠損を補うための一つの試みであって、例に引いたような語りの上での形式を分析し、その上で特に物語の後半においてこの形式が変容していく過程を把握、そこに物語の主題に係わる積極的な意味を見出すことを目的としたものである。

1. 小構造の分析と分類

『探索』全体の構造は、上に指摘した通りに、一つのエピソードを表層と深層の二面から、各々を事件 *aventure*²⁾とその注釈 *commentaire* という形で語る枠組を単位として、およそ三十のこの単位の積み重ねを主要な軸に構成されている。ここではこの単位を、物語全体の構造を支える構成要素として、「小構造」の名で呼ぶこととする。この小構造は、物語の語りの中で明らかに見えてとれる幾つの特徴を共有しており、それらはテキストのレベルにおけるものと物語のレベルにおけるものとの二つに大別できる。

まず第一に、テキストのレベルにおいて特徴的な点は、注釈が常に、ディスコースにではなく、非人称的叙述としてのレシの中に挿入されていることである³⁾。つまり、一つの事件に関して、その深層は語り手から読者に向けてのみ明らかにされる、というのでなしに、一登場人物の口を通して、他の登場人物との対話の中で語られるという形式をとってレシの中にはめこまれていく。注釈をレシの中に導入するのは多くの場合次のような定型表現である。

[...] Galaad dist au chevalier [ange?] : <Sire, par cest escu que je port sont maintes aventures merveilleuses avenues en cest païs, si com j'ai oï dire. Si vos voudroie prier par amor et par franchise que vos m'en deissiez la verité et coment et por coi ce est venu, car je croi bien que vos le sachiez.>——<Certes, sire, fet li chevaliers, je le vos dirai volentiers, car je en sai bien la verité. Or escoutez, s'il vos plaist, Galaad>, fet li chevaliers.(p. 31, l. 30 — p. 32, l. 5)

あるいは、

<Et savez vos, fet Galaad, por quoi tantes merveilles en sont avenues?>——<Sire, fet cil [li preudons], oï bien, et je le vos dirai volentiers; et vos le devez bien savoir come la chose ou il a grant senefiance.>(p. 37, ll. 11 — 14)

これらの問答は、注釈のレシへの導入に必要な幾つかの要素を暗示している。まず、問う側が、遭遇した事件には深層となるべきもう一つの事実が存在することを認識すること、また、その深層は問う側の知覚には決して解明し得ないこと、さらには、答える側が深層の解明に十分な知識、知恵を有していること、等である。

次に物語のレベル、より具体的に言えば、登場人物の機能に関して考察を加えよう。『探索』においては、各登場人物が物語の展開に果たす役割、機能について、厳密な分担が見られる。T. Todorov が「物語の探索」と題する小論で指摘していることだが⁴⁾、小構造の前半、つまり試練への挑戦や不思議の目撃などの事件で中心的な役割を果たす人物と、後半部で注釈を語る人物とは、決して混同されることがなく、作品中の登場人物はこの二つの機能のうちのどちらか一方しか荷うことができない。そして、仮に前者を「行動する者」とすれば、後者は「注釈を加える者」と呼べようが、「行動する者」とは社会的身分上では騎士達であり、「注釈を加える者」は多くの場合隠者あるいは修道士といった世俗から離れて宗教の道に身を奉ずる者達で、時によっては彼等以外に超自然的な存在、天使の化身や悪魔、さらには主イエスなどが注釈を語るために登場することもあるが、二つの機能は、ほぼ二つの社会的身分に従って登場人物達に振り分けられていると言ってよい。それ故、不思議を垣間見た騎士達は、その謎を解いてもらうためには隠者を訪ねに出発せねばならない。

<A non Dieu, fet messire Gauvains, nos avons anuit tant veu en dormant et en veillant que li mieulz que je i sache a nostre oes, si est que nos aillons quierre aucun hermite, aucun preudome qui nos die la senefiance de noz songes et la senefiance de ce que nos avons

小構造のもたらすこのような物語展開上の条件に着目するならば、聖杯探索の遍歴とはそのまま「注釈する者」探索の旅であるとさえ言うことができるかも知れない。

さて、ここまで『探索』の小構造としてまとめて扱ってきた形式は、実際には注釈の内容によって二種類に分類することができる。一つは、注釈が事件の由来となった出来事を過去に溯って解き起こす、いわば回顧的 *rétrospectif* なものである構造であり、もう一つは、事件の現象中に現れた様々な象徴を解説する、解釈的 *interprétatif* な注釈を持つものである。前者における注釈には例えば、ガラアドの得た白い盾の縁起をアリマタヤのヨセフの時代にまで溯って明らかにする白い騎士（実は天使？）の語り、「乙女達の城」のエピソードで城の悪習の起源を述べた一司祭の物語などが含まれ、後者における注釈には先に挙げたランスロに対する神の呼びかけを解釈した隠者によるもの、「修道院の墓地」の不思議を高僧が象徴的に読み解いたものなどがある。またなかには、延々続く一つの対話の中で、二つの出来事について、一つには象徴的解釈を与え、もう一つには回顧的説明を述べるという形の変則的な注釈もある（ペルスヴァルの叔母は、甥との対話中で、ガラアドのアーサー王宮廷への来訪について象徴的解釈を与え、「危険の椅子」の試練に関して回顧的にメルランによる椅子、円卓の建造を語っている）。

従来、『探索』において事件 *aventure* と注解 *glose* による語りの二重性が論及される時は、解釈的注釈を注解として持つ小構造にのみ論点が限定され、回顧的注釈に係わる小構造は等閑視されて、回顧的物語の挿入はいわゆる注解とは違って、先行する事件を持たない独立した余談、物語の逸脱として看做されてきた。物語に重要性を見出した研究者には E. Baumgartner がおり、独自の論点から興味深い意見を述べているが、氏にしても回顧的物語の導入に際して「事件—注解」と同じ構造の二重性を見るには至っていない⁵⁾。これは、回顧的物語が多くの場合物語中に現れた何らかのオブジェ（「危険の椅子」、円卓、「奇妙な負い帯の剣」等）の由来について語るものであり、それと認めるのが容易な物語性のある事件が先行しているものとは考えにくかったからである。しかし、例えば先に挙げた「白い盾」のエピソード、「危険の椅子」の試練では、事件と呼び得るだけの十分な物語的展開が見られ、これについての回顧的注釈を、先行する事件のない、物語からの単なる逸脱と看做することはできない。そこで、本論文では<*aventure*>の語義を広く採り、物語性のある事件から、不思議な出来事の見撃、不思議なオブジェの発見までを含ませ、全ての回顧的物語を先行する事件を持つものと読解できるように考えた。『探索』中における「事件—注釈」の小構造の判別については別表の通りである。

さて、このような小構造は、物語の大部分において頻繁に見出されるものの、その後半、A. Pauphilet が三部構成のうちの第三部にあたるとした部分⁶⁾では、上述の小構造の諸特徴に揺らぎが生じ、ついには全く新しい特徴を持つ構造へと変容し、あるいは解消してしまう。この変化は、

表：『探索』中のエピソード一覧

この表は『探索』中の「事件―注釈」の図式に則って語られたエピソード全てを列挙したものである。
各エピソードの名称は Pauphilet 版に付された小題に準拠している。

	エピソード	事件<aventure>	注釈<commentaire>	図式別
1	ガラアド到着	pp. 7-8	pp. 78-79	B
2	「危険の椅子」	p. 8	pp. 74-78	A
3	盾の試練	pp. 26-31	pp. 31-35	A
4	墓の不思議	pp. 35-37	pp. 37-40	B
5	メリアンへの罰	pp. 41-42	pp. 44-46	B
6	「乙女達の城」	pp. 46-48	pp. 49-50	A
7	ゴーヴァンの誤ち	pp. 51-53	pp. 54-55	B
8	見放されたランスロ	pp. 58-62	pp. 67-70	B
9	モルドラン王	pp. 81-83	pp. 83-86	A
10	島のペルスヴァル	pp. 91-98	pp. 101-104	B
11	ペルスヴァルの誘惑	pp. 104-110	pp. 112-114	B
12	隠者の死	pp. 118-119	pp. 119-122	A
13	ランスロの幻視	pp. 130-131	pp. 134-138	A
13 bis.	エヴァラクの夢	pp. 134-135	pp. 135-138	B
14	象徴的な騎馬試合	pp. 140-141	pp. 143-145	B
15	ゴーヴァン・エクトールの夢と幻影	pp. 149-151	pp. 155-160	B
16	自死する鳥	pp. 167-168	p. 184	B
17	財産を失った女	pp. 168-174	pp. 184-185	B
18	ボオールの幻視	pp. 170-171	pp. 185-187	B
19	「奇妙な負い帯の剣」	p. 203 pp. 205-206	pp. 204-205 pp. 206-210	A A
20	「生命の木」とソロモンの船	p. 210	pp. 210-226	A
21	カルスロワ城	pp. 229-230	pp. 231-233	A
22	白い鹿	pp. 234-235	pp. 235-236	B
23	癡女（の城）	pp. 236-238	p. 239	A
24	神の罰	p. 243	pp. 244-245	B
25	ランスロの航海	pp. 246-248	pp. 248-249	B
26	聖杯城でのランスロへの罰	pp. 255-256	pp. 258	B
27	泉のガラアド	p. 263	p. 263	B
28	シメオンの墓	p. 264	pp. 264-265	A
29	聖杯の典礼	p. 269	p. 269	B
30	聖杯の由来	p. 270	pp. 270-271	A

<Veoir plus apertement...>

上に分類した回顧的注釈を持つ小構造（仮りにA図式とする）と解釈的注釈を持つ小構造（B図式とする）とでそれぞれべつの過程を踏んで実現されていくのだが、以下、各々の過程を別個に分析することにする。

a. A図式の変容

回顧的注釈によって事件を説明するA図式に形態上の乱れが見られるようになるのは、物語の終盤近く、ソロモンの船に関する一章においてである。

〈一種超越的な存在であるペルスヴァルの妹⁷⁾に導かれた三人の騎士、ボオール、ペルスヴァル、ガラアドは、船に乗ってある孤島に到り着く。孤島の岩礁上には一隻の船が乗り上げており、騎士達はその船中に「奇妙な負い帯の剣」、さらには船上の一寝台に天蓋のように架け渡された三本の色の異なる木から成る柱を発見する。これらの不思議に驚く三騎士に対し、剣の縁起についてはペルスヴァルの妹が説明を与えるが、三色の木については次のような書き出しで注釈が挿入される。〉

Et por que maintes genz le porroient oïr qui a mençonge le tendroient, se len ne lor faisoit entendant coment ce poroit avenir, si s'en destorne un poi li contes de sa droite voie et de sa matiere por deviser la maniere des trois fussiax qui des trois colors estoient.(p. 210, 11. 23 — 28)

ここで挿入される注釈は、三色の木の由来をアダムとイヴの樂園追放まで溯って説き起こし、ソロモン王による船の建設までを語ったものである。この注釈は、それまでとは全く異なる語りの上での特徴を持っている。一つには、それまでは登場人物間の対話という形でレシのレベルにはめこまれていた注釈が、このエピソードでは「語り手による物語の中断」という形式によってディスクールレベルに挿入されていることである。もちろん、『探索』の語り手は中世文学の伝統に従って常に自らの存在を隠蔽しているから、全編を通じて物語を説く役目は「物語」自体、<le conte>にあると主張されている。このためにソロモンの船のエピソードでも、注釈を加える者はより正確な表現をすれば、語り手の意思を託された「物語」ということになるだろう。しかし、いずれにせよそれまでなら注釈の導入に不可欠とされた、語りを委託された登場人物が消えてしまったことは注目に値する。

それではこのようにしてディスクールの中にはめこまれた注釈の内容を、登場人物達はどうやって知り得るのであろうか。その点にこのエピソードの語りの上での第二の特徴がある。実は騎士達への注釈の提示の場面においても、注釈者としての人物は姿を現さない。

Et quant il [les trois chevaliers] l'orent assez regardé [le lit dans la nef], si leverent le drap et virent desoz la coronne d'or, et desoz la coronne une aumosniere molt riche par semblant. Et Percevax la prent et oevre, et troeve dedenz un brief. Et quant li autre voient ce, si dient que, se Diex plect, cist briés les fera certains de la nef et dont ele vint et qui la fist premierement. Lors comence Perceval a lire ce qui ert ou brief, et tant qu'il lor devise la maniere des fussiax et de la nef ainsi come li contes l'a devisee.(p. 226, ll. 12 — 19)

これは三色の木、ソロモンの船の由来が「物語」によって語られた直後に見出される。ここでは、騎士達に注釈を語るのは肉体を持った人間ではなく、手紙、即ち文字である。これまでエピソード中の注釈は登場人物の語る言葉を通してのみ騎士達に提示されていたのに対し、これは大きな変化と言えよう。

この手紙が誰によって書かれたかは、『探索』の中では明らかにされていないのだが、注釈にも言及されているソロモンの時代に書かれたものであるのは確かだろう。すると、さらにもう一つ特徴的な変化が見てとれる。つまり、注釈の発話者が騎士達とその生を送った時代を共有せず、回顧的解釈の中に語られる遙かな過去に生存していたというのは、これが初めてなのである。なるほど、ただ単に注釈者が語られるべき昔の出来事を自ら目撃していたというだけならば、「三つの城」としてまとめて論及されることの多い「乙女達の城」、「カルスロワ城」、「癡女の城」の三つのエピソードにおいて回顧的物語を語る司祭達と同列に考えることもできよう。しかし「ソロモンの船」が決定的に異なる点は、かの司祭達が肉体という制約によって極く最近の事件、アーサー王宮廷と同時代の出来事しか語れないのに対し、「ソロモンの船」中の手紙は一挙に時を超えて、旧約聖書の時代を同時代からの証言として語り得ていることである。それまでの回顧的注釈は、上に挙げた「三つの城」のように同時代中でやや以前に起きた事件を直接目撃したものとして証言するか、あるいは、さらに時代を溯って語る時には、注釈者が自らの知る伝承などに基いて語るかのどちらかであった。物語の展開する時間に対して相対的に「歴史的」とでも呼び得る時代の出来事について、それと同時代からの証言を得る点が、それまでに見られなかった図式上の特徴である。

そして、この後のA図式の変化は、後者の点を共通の軸として展開する。次にA図式の変化が見られるのは、「シメオンの墓」のエピソードである。

<他の騎士達と別れて一人遍歴を続けるガラアドは、かつて父ランスロが収拾に失敗した⁸⁾シメオンの墓の不思議を解消し、墓の周囲の炎を消し止める。するとどこからか声が聞こえ、不思議の由来を語る。> Quant il [Galaad] vint a la tombe, si leva contremont et vit

<Veoir plus apertement...>

dedenz le cors de Symeon qui avoit esté deviez; et si tost com la cholor fu remese, oï une voiz qui li dist : <Galaad, Galaad, molt devez rendre merciz a Nostre Seignor de ce que si bone grace vos a donee : car par la bone vie de vos poez vos retrere les ames de la peine terrienne, et metre en la joie de paradis. Ge sui Symeu vostre parent, qui en cest grant cholor que vos veistes ore ai demoré trois cenz anz et cinquante et quatre por espeneir un pechié que je fis jadis envers Joseph d'Arimacie. Et o la peine que j'ai sofferte fusse je perduz et dampnez. [...]>(p. 264, ll. 19 — 29)

シメオンはガラアドの遠い祖先の一人であり、当然ながらガラアドの同時代でなく、ここではその亡骸を前に声を聞いたとある。ここでもまた、ガラアドの生きる時代を超えて、遠い昔からその時代の証言がよみがえったことになる。

それだけではない。以前は、注釈を語る者は語られる事件に関して全くの第三者としてのみ登場した。数々の回顧的物語が司祭などによって語られたけれども、語られた事件について直接の利害関係を持っていた語り手はおらず、それどころか注釈する者自らが語られた物語中に登場するなどという事態はまずなかった。「ソロモンの船」で騎士達に語りかけた手紙は作者不明であり、その点について曖昧さを残していたが、「シメオンの墓」ではもはや明らかに、注釈者と語られた事件とは無関係ではない。注釈の語り手即ち出来事の当事者、しかもその中心人物なのだから。A図式においては、出会う事件、オブジェとは本質的に過去の出来事の現在への名残りという性格を帯びたものである。騎士達は遍歴の過程で過去の残滓に遭遇するものだが、ここでは、そのような間接的な過去との出会いだけでなく、過去に起きた出来事の中心人物と時を超えて邂逅することで、騎士はより直接的に歴史的過去を追体験する。ここには、騎士達の時代と伝承の時代との時間的隔たりを一気に解消し、物語をより大きな時間を包摂するものへと発展させようとする意志が働いていると解することができまいか。

このようにして変化してきたA図式は、最後のエピソード「聖杯の典礼」中では次のようになる。

Lors prist il meismes [Jésus-Christ] le saint Vessel et vint a Galaad. Et cil s'agenoille et il li done son Sauveor. Et cil le reçoit joieux et a jointes mains. Et ausi fist chacuns des autres, ne n'i ot nus a qui il ne fust avis que len li meist la piece en semblance de pain en sa bouche. Quant il orent tuit receu la haute viande, qui tant lor sembloit et douce et merveilleuse qu'il lor ert avis que toutes les soatumes que len porroit penser de cuer fussent dedenz lor cors, Cil qui ainsi les ot repeuz dist a Galaad : <Filz si nez et si espurgiez come hom terriens puet estre, sez tu que je tieng entre mes mains?>—

<Nanil, fet il, se vos nel me dites.>——<Ce est, fet il, l'escuele ou Jhesucriz menja l'aignel le jor de Pasques o ses deciples. Ce est l'escuele qui a servi a gré toz çax que j'ai trovez en mon service; ce est l'escuele que onques hons mescreanz ne vit a qui ele ne grevast molt. Et por ce que ele a si servi a gré toutes genz doit ele estre apelee le Saint Graal. [...]>(p. 270, ll. 17 — 33)

今度の語り手は主イエスであり、彼が自らの最後の晩餐と聖杯との関係を説き明かしている。以前の「ソロモンの船」、「シメオンの墓」両エピソードよりも内容的により重要な、作品全体の主題の核心に触れる場面であることは疑いないが、ここで注目したいのは、注釈者としてのイエスの登場の仕方である。「ソロモンの船」では、注釈は手紙によって騎士達に伝えられた。「シメオンの墓」では姿なき声がガラアドに語りかけた。そして今やキリストは人としての姿をとってガラアドの眼前に現われ、彼に呼びかけている。歴史的時代の証人がその身体もそのままに登場したのである。

A図式はこの三つのエピソードを通じて変容、発展していくのだが、これらエピソードの間の発展のプランは明白である。まず、これらは共通して、歴史的時間を物語内に呼び出し、物語内時間に融合することを目指している。変容の始まる前のA図式では、注釈中の物語はあくまで過ぎ去った昔の物語に過ぎず、客観的に物語上の時間とは切り離されていたが、変容以降、その「過去」は物語中の「現在」へと滲透を開始するのだ。この滲透は段階的に行われる。最初は手紙——文字によって。それから聴覚に訴える声によって。最後にイエスという人物が生ける形のまま到来して、聴覚のみならず、その声を持つ本人の姿という具体的な視覚をも伴って過去を現前させる。このようにして、聖杯の典礼という騎士達の探索の終着点では、過去と現在が一つに融合する瞬間を迎えるのである。

b. B図式の変容

象徴解読やアレゴリーの読解によって事件に解説を加えていくのが解釈的説明であったが、これを伴う小構造であるB図式もまた、A図式同様物語の大団円が近づくに従って変化を重ねていく。それら変化に共通する最大の特徴はB図式の場合、「解釈する者」でしかあり得ない、専従者としての注釈者が物語から姿を消してしまうことである。

先にも述べたように、一つのエピソードに事件に関する注釈を挿入するために物語の語り手は、自らは行動することはないが騎士達と出会い、彼等の語る事柄に耳を傾け、適当な解釈を与えることを専らの役割とする人物を幾人となき物語に登場させた。それらは司祭であったり、修道士であったり、場合によっては神の化身であったりしたが、ほぼ常に人の姿をとって物語に現われ、専ら「行動の人」である騎士達との対話の中で、彼等の遭遇した出来事に与えらるべき説明を述

<Veoir plus apertement...>

べ伝えた。つまり、語り手は登場人物の創出にあたって「行動」を担う者と「解釈」を担う者の二系列に厳密に役割を区別し、それぞれを、前者の役割は騎士階級に、後者は聖職者乃至隠者にと、社会的身分に従って分担させた。『探索』は、このような「武勇」と「智」の二つの徳目の人格化を描き、二つの共存のさまを暗喩として提示している、と言ってもよいのではなかろうか。ところが、物語の後半もかなりを過ぎると、そのうちの一方、「智」の人格化が語り手によってなおざりにされる場面が幾つか現れる。一つは、「癡女の城」のエピソードに続く「神の罰」に見られる。

くペルスヴァルの妹の自己犠牲によって城主の癡病は全快し、三人の騎士は城を後にする。が、その晩激しい雷雨が城一帯を襲い、城は住人共々に全滅する。ペルスヴァルとガラアドは援助のために城に戻ってみるが、生者はもはや一人も残っていなかった。> Quant li compaignon voient ceste chose, si dient que ce est esperitel venjance. <Et si ne fust ja, font il, avenu, se ne fust por apaier le corroz au Creator dou monde.> En ce qu'il parloient einsî, si oïrent une voiz qui lor dist : <Ce est la venjance dou sanc as bones puceles, qui çaienz a esté expanduz por la terrienne garison d'une desloial pecheresse.> (p. 244, l. 26 — p. 245, l. 2)

ここで「智」は、一個の人格を持たない単なる「声」のみの存在として描かれている。もう一例は、ガラアドがその遍歴の終わり近くに体験する試験についての場面である。

[... Galaad] chevaucha tant par ses jornees qu'il vint en la Forest Perilleuse ou il trova la fontaine qui boloit a granz ondes, si com li contes a devisé ça en arrieres. Et si tost come il i ot mise la main, si s'em parti l'ardor et la cholor, por ce que en lui n'avoit onques eu eschaufement de luxure. (p. 263, ll. 27 — 32)

このエピソードは『探索』に先行する『ランスロ本伝』*le Lancelot propre* 中の一エピソードに由来するものであるが⁹⁾、そのせいもあろうか、ここではガラアドの成した不思議の象徴解釈はごく簡単に、それもディスクールのレベルで読者に与えられるに過ぎない。以上二例共に明らかなのは、物語の結末近くに至って、語り手の側に「智」に独立した人格を与えて物語の中に登場させようという意志が微弱になってきたことである。しかし、この「智」による注釈を全く欠いてしまつては、B図式をとるべき事件は存在の意義を失うことになる。何故ならば、B図式における「事件—注釈」の対置は、コードとその解説、<semblance>と<senefiance>の対置であり、事件に注釈が与えられないのならば、解説の不可能なコードを放置してしまうことになるからで

ある。では、「智」の人格化が見られなくなった物語において、コードの解説、<senefiance>はどのような形で与えられるようになるのか。

まず現れるのは、「武勇」の人格化である騎士が「智」の役割をも自らのうちにとりこむ、という姿である。この原型は既に「ペルスヴァルの誘惑」のエピソードの結尾に見られる。

〈絶海の孤島で悪魔の誘惑をからくも退けたペルスヴァルは、船に乗って彼を訪れた正体不明の人物から我が身に振りかかった不思議の象徴解釈を聞かされ、大いに感動して彼に語りかける。〉 <Par foi, fet il, onques puis que vos venistes devant moi ne senti mal ne dolor, ne plus que se je onques n'eusse plaie; ne encor tant come vos parlez a moi n'en sent je point, ainz me vient de vostre parole et de vostre regart une si grant douçor et un si grant asouagement de mes membres que je ne croi pas que vos soiez hons terriens, mes esperitiex. Si sai de voir, se vos demoriez toz dis o moi, je n'avroie ja ne fain ne soif; et se je l'osoie dire, je diroie que vos estes li Pains vis qui descent des ciex, dont nus ne menjue dignement qui pardurablement ne vive.〉(p. 115, ll. 3 — 13)

このエピソードを除いては、「武勇」の人、騎士達は、自らの眼にした不思議についてその一片すらも解き明かすことはできない者として描かれてきた。ここでのペルスヴァルは自分を訪れた人物を、そのもたらす恩寵から主イエスその人であると看破した点で、「智」の一端を把握したと言ってもよいだろう。しかし、この時点でのペルスヴァルは、自分に振りかかった試練に関して言えばむしろ副次的な謎を解き明かしたのみで、試練そのものの象徴を解くには至っていない。だからこそ注釈者としての、つまり「智」の肉化としての主イエスを必要としたのであって、その意味ではこのエピソードは、B図式を堅牢に守ったプリミティブなものに留まっている。

「智」の役割を騎士がすっかりとりこんでしまうエピソードは、さらに物語が進んで後、聖杯城を訪れたランスロを待たねばならない。

〈ペルスヴァルの妹の亡骸を載せた船に導かれて、ようやくランスロは聖杯を戴くコルブニック城に到着する。深夜の城内で彼は聖杯による典礼を目撃するが、典礼の秘蹟を理解できぬために聖域に思わず足を踏み入れて、炎に吹きとばされ、そのまま全身の力を失って二十四日間眠り続ける。目覚めた後ランスロは、城内の者から自分の眠りの二十四日に及んだ事を聞かされる。〉 Et quant il ot cest parole, si comence a porpenser par quel senefiance il avoit tant demoré en cel estat. Et tant qu'il s'apensa qu'il ot ou terme de vint et quatre anz servi a l'anemi, por quoi Nostre Sires le mist en tel penitance qu'il ot perdu par vint et quatre jorz le pooir dou cors et des membres. (p. 258, ll. 19 — 24)

ここで重要な点は、ランスロが他の誰の知恵も借りずただ自らの智力のみで思索し、不思議の象徴解読に成功したことである。それまでの騎士達の、ある意味では自ら考えることを放棄したとみとれる態度とは違い、ここでのランスロは自分以外の「智」の人格を恃もうという姿勢は少しも見られないし、事実それだけの十分な知恵を既に手に入れていたわけである。この「智」はどこからやってきたものであろうか。本文には明示されてはいないが、ランスロが王妃グニエールとの不倫を悔改めて後、苦行衣を身にまとして日夜神への祈りを欠かさなかったことが、「智」の獲得に結びついたとみてまず良からう。先に挙げた「ペルスヴァルの誘惑」でも、悪魔の試練に打ち勝ったことがわずかながら「智」への導きとなったと読むことができる。

しかし、騎士達による「智」の獲得はこれに留まらない。ランスロよりさらに神の恩寵厚い三人の騎士、ボオール、ペルスヴァル、ガラアドは、ランスロの聖杯城での冒険より後、同じ聖杯城で、注釈者達の手を煩わさないことは同じながら、全く異なる形で「智」を自らのものとする。

Lors fist Josephes semblant que il entrast ou sacrement de la messe. Et quant il i ot demoré un poi, si prist dedenz le saint Vessel une oublee qui ert fete en semblance de pain. Et au lever que il fist descendi de vers le ciel une figure en semblance d'enfant, et avoit le viaire ausi rouge et ausi embrasé come feu; et se feri ou pain, si que cil qui ou palés estoient virent apertement que li pains avoit forme d'ome charnel. Et quant Josephes l'ot grant piece tenu, si le remist ou saint Vessel. (p. 269, ll. 13 — 21)

この聖杯の典礼の場面は、キリスト教の秘蹟に盛られた全実体変化 transsubstantiation の思想を視覚化したものであり、パンから変化した幼な子は、化体した聖餅を象徴している。そして、これが単に物質界の現象中に奇蹟と実体化したもの、つまり他の図式中で言うところの<aventure>と同じものではなく、霊的な現象が物質界と二重写しとなって眼前に現れたものとして『探索』の語り手によって考えられていることは、先の「聖杯城でのランスロ」のエピソードの一節を見れば明らかである。ランスロは三騎士に先駆けて同様の典礼を目撃した。

Et devant le Saint Vessel seoit un vielx hons vestuz come prestres, et sembloit que il fust ou sacrement de la messe. Et quant il dut lever *corpus domini*, il fut avis a Lancelot que desus les mains au preudome en haut avoit trois homes dont li dui metoient le plus juene entre les mains au provoire; et il le levoit en haut, si fesoit semblant qu'il le mostrast au pueple.

Et Lancelot, qui regarde ceste chose, ne s'en merveille pas petit : car il voit que li

prestres est si chargiez de la figure qu'il tient, qu'il li est bien avis que il doie chaoir a terre. Et quant il voit ce, si li velt aler aidier, car il li est bien avis que nus de çaux qui o lui sont ne le voille secorre. Lors a si grant faim d'aler i qu'il ne li sovient del deffens qui li avoit esté fet de ce qu'il n'i meist le pié. Lors vient a l'uis bon pas et dit : <Ha! biax peres Jhesucriz, ne me soit atorné a peine ne a dampnation se je vois aidier a cel preudome qui mestier en a.> Et lors entre dedenz et s'adrece vers la table d'argent. Et en ce qu'il vient pres, si sent un souffle de vent ausi chاوز, ce li est avis, come s'il fust entremeslez de feu, qui le feri ou vis si durement qu'il li fu bien avis qu'il li eust le viaire ars. Lors n'a pooir d'aler avant, come cil qui est tiex atornez qu'il a perdu le pooir dou cors, et del oïr et del veoir, ne n'a sor lui membre dont il aidier se puisse. (p. 255, l. 19 — p. 256, l. 9)

ここでのランスロは、聖杯の典礼を単純に物質界の出来事としてしか理解し得なかった故に司祭に力を貸そうとした。他の列席者の誰もが「助けようとしなかった」のは、今現前していることが霊的な現象であることを彼等は知っていたからであり、他方その点についての無明故にランスロは退けられたのである。

つまりこれらの場面では、物質的なものと霊的なもの、今までのエピソードでは表層と深層、<semblance>と<senefiance>として二つに分かたれていたものが一つに混淆したものとして描写されており、三騎士の場合はそれを見る彼等もその二重性を十分認識し得ていたのである。ランスロにおいては、<semblance>を体験した後での十分な内省によってのみ知覚することのできた<senefiance>が、寸時の熟慮もはさむことなく三騎士にはその存在が認識され、内容が理解される。「智」を自らの外の人格として要求することなく自らの内に獲得した点では四人の騎士は等しく成長したと言えるが、なおその程度において差があったことが、それぞれの有する「智」の有様からも察せられるのである。

II. 探索の意義

そもそも「探索」とは何を求める旅であったのか。ただ単に聖杯を探しあてるための旅であるならば、騎士達はひたすらコルブニック城を目指して駒を進めるべきだった。にもかかわらず、例えばガラアドなど、一時は「コルブニックよりニリユーのところまで来」ながら¹⁰⁾、その地を離れて海をも渡り、結局コルブニックに至るまでにさらに五年以上の月日を費やしてしまう。つまり、聖杯に近付くことそれ自体は、彼等の遍歴の第一義たり得なかったのだ。

<Veoir plus apertement...>

「B図式の変容」として上述した考察は、騎士達の遍歴の意義について少なくともその一端を我々に教えてくれる。即ち、この遍歴は騎士達が隠者の徳目を自らのものとする過程、「武勇」と「智」という、物語が始まった時既に分割して所有されていた徳目を、騎士階級の側において統合することを目的とした道程であった。J. Frappierは『探索』について、作中の「地上的騎士道」chevalerie <terrienne>と「天上的騎士道」chevalerie <celestielle>の対照を指摘し、<Les erreurs de la chevalerie |<terrienne> sont condamnées et non la chevalerie elle-même. Plus encore : la [chevalerie] <celestielle> sort de la <terrienne> tout en la dépassant; le meilleur chevalier de la chevalerie <celestielle>, Galaad, est le fils du meilleur chevalier de la chevalerie <terrienne>, Lancelot. Remplacer idéalement la <terrienne> par la <celestielle>, c'était une manière d'exalter plus encore la chevalerie¹¹⁾>と述べているが、「地上的」と「天上的」の二つの騎士道について、「武勇」だけを我が物とする騎士道を前者、「智」をも統合したものを後者と定義してもよからう。そして、この「天上的」騎士道を全うしない限り、聖杯との出会いは達成し得なかった。

ここで問題とせねばならないのは、求めるべき「智」の性質である。いかなる「智」の在り方が徳目の完成を意味するものではなく、その様態が騎士達の遍歴の道程に沿って低次のものから次々と発展しながら、最終的な、至高の「智」へと到達する過程を、この物語は語っている。

まず初めに騎士の得る「智」は、自らの身に及ぶ冒険、試練とは何の関係もない、書物的な知識として描出される(従って本論の扱ってきた小構造の枠組の外にその記述が見られる)。ボオールが一司祭と対面する場面において、彼はキリスト教の秘蹟を詳述してみせる。

Et quant il [li preudons] ot fete la beneïçon, si prent *corpus Domini* et fet signe a Boort qu'il viegne avant. Et il si fet et s'agenoille devant lui. Et quant il est venuz, li preudons li dit : <Boort, voiz tu ce que je tiegn?>—<Sire, fet il, oïl bien. Je voi que vos tenez mon Sauveor et ma redemption en semblance de pain; et en tel maniere nel veisse je pas, mes mi oïl, qui sont si terrien qu'il ne pueent veoir les esperitex choses, nel me lessent autrement veoir, ainz m'en tolent la veraie semblance. Car de ce ne dout je mie que ce ne soit veraie char et verais hons et enterine deité.>(p. 166, l. 33 — p. 167, l. 9)

これは聖杯の典礼において彼が幻視する内容と全く同じことを語っている。しかし、彼自身自覚している通り、このような客体的、純粹に理性的な「智」の理解は全く不完全である。ボオールにおいてこの知識は、彼の目撃する不思議を解き明かすための何らの鍵にもなり得なかったし、悪魔の誘惑に際して未然に逃れる術も与えてくれなかった(「財産を失った女」のエピソード)。「智」への、その所有者の係わり方は、より主体的であり、所有者の内面的な、切迫した希求に

基づくものでなければならない。つまり、枠組みとしての「事件—注釈」という図式の中で、一つの事件を解釈せねばならないときの注釈に係わる「智」へと、騎士の「智」は発展せねばならない。

この主体的な「智」が、「聖杯城でのランスロ」が示したものである。ランスロは、自身に起こった不思議の意味を知るために、どうしても自らの「智」を必要としたのだった。その切迫した思いを支えるだけの活性化された「智」を、ランスロは悔悛と苦行の果てに手に入れていたのである。

しかし、この「智」を得ながら何故ランスロは聖杯の秘蹟に与ることができず、探索の目的を達することができなかったのか。それは彼の「智」が主体的な要請にあるものとは言え、未だ理性的、反省的思考に基づくものでしかなく、聖杯の典礼のような直截な幻視にあたって秘められた二重性を即座に受け容れることができなかったからである。その点において三人の選ばれた騎士が聖杯の典礼において示した「智」はまさに至高のものと言ってよい。典礼という表層に主体的に近付きながら、感覚的、直截的な深層の捉え方をする。即ち幻視 vision という、思考によらない感覚による把握である。言語による辞書の知識も、また言語を基に組み立てられた理性的思考も、言語を用いない、視覚による幻視の与える衝撃には比肩できなかったのだ。

ここまで考えたとき、我々は上のように定義された「探索」の意義を、A図式の変容の過程によっても裏付けることができないだろうか。A図式では、注釈の語り手が第三者から回顧的注釈の内容の中で中心的な役を果たした人物へと移行する。彼等は初めは手紙で、次に声で、最後に姿を伴って騎士達の眼前に現れるが、この「文字—声—姿」の過程もまた、回顧的物語の核心を「幻視」によって把握するに至る過程に他ならない。回顧的注釈は、本質的に博学上の知識としての体裁をとるから、解釈的注釈のように自らの主体的「智」をもって見通すというわけにはいかない。それ故注釈者が登場しなくなることはないが、「幻視の中での注釈」という形態により、回顧的物語の理解も最後には視覚を伴う直截的なものとなる。

ここで我々は『探索』の冒頭の一ページに戻ろう。聖杯の探索を始めるにあたって、ゴーヴァンは一体何と誓ったか。

<[...] ne ne revendrai a cort por chose qui aviegne devant que je l'aie veu plus apertement qu'il ne m'a ci esté demostrez, s'il puet estre en nule maniere que je lou puisse veoir ne doie. [...]>(p. 16, ll. 21 — 24)

ゴーヴァンの言葉が端無くも示した通り、「探索」においては「見る」こと、よりよく視おこせるようになることが第一の目的であった。聖杯は事物の<senefiance>をはっきりと「見る」ことが出来たときに初めて「見る」価値を持った。この幻視を得るために、ガラアドは長い遍歴を通じ

<Veoir plus apertement...>

て失われた「智」を統合するための手続きを完遂した。今やガラアドにとって、全ての「智」の根源は「視る」ことによって扱えられるものであり、それが物語の大団円に起こる聖杯の奇蹟の意味である。

<Vien avant, serjant Jhesucrist, si verras ce que tu as tant desirré a veoir.> Et il se tret avant et regarde dedenz le saint Vessel. Et si tost come il i ot regardé si comence a trembler molt durement, si tost come la mortel char commença a regarder les esperitex choses. Lors tent Galaad ses meins vers le ciel et dit : <Sire, toi ador ge et merci de ce que tu m'as acompli mon desirrier, car ore voi ge tot apertement ce que langue ne porroit descrire ne cuer penser. [...]>(p. 277, l. 30 — p. 278, l. 5)

註

- 1) テキストは *La Queste del Saint Graal*, éd. A. Pauphilet, CFMA, n° 33, Champion, 1923 を使用し、引用毎に参照頁を振った。また、多数のエピソードについての言及があるが、煩雑さを避けるためにそれらについての参照指示は別表に一括し、本文中では省略した。
- 2) <aventure>は適当と思われる定訳のない語であり、また後述するように当論文では語義を広く解釈していることも踏まえて、本文中では幾つかの訳語を適宜使い分けるようにした（事件、不思議、試練など）。
- 3) ここで用いられているディスクール discours とレシ récit の二概念は、E. Benveniste によって定義されたものをそのまま踏襲している。
- 4) T. Todorov, <la Quête du récit> dans *Poétique de la prose*, Editions de Seuil, 1971, pp. 131–132.
- 5) E. Baumgartner, *L'Arbre et le pain*, SEDES, 1981. 特に p. 83 以降を参照のこと。なお、E. J. Burns, *Arthurian Fictions*, Ohio University Press, 1985は、本論文執筆後に入手したため言及することができなかった。
- 6) A. Pauphilet, *Etudes sur la Queste del Saint Graal*, Champion, 1921, p. 168 ss.
- 7) ペルスヴァルの妹は特権的な地位を得ている人物であり、その機能の分析は当論文の主題について幾つかの興味深い示唆を与えてくれるが、ここでは敢えて扱わないことにする。
- 8) *Lancelot, roman en prose du 13^e siècle*, éd. A. Micha, TLF, Droz, 1978–83, XXXVII, 26 ss.
- 9) *Ibid.*, XCIII, 3 ss.
- 10) p. 197, ll. 32–33.
- 11) J. Frappier, <Le Graal et la chevalerie> dans *Autour du Graal*, Droz, 1977, pp. 116–117.